

一心寺かわら版

第四十号 平成二十九年三月発行

ホームページ・ブログ・フェイスブックは「持名山一心寺」で検索

あれから六年、東日本大震災の地を訪れて

二月、真宗教団連合の東日本大震災現地研修に参加。被災地支援を考えるため、岩手県の大船渡市、陸前高田市を訪れました。震災、津波の直接被害が最も大きかった宮城。原発事故により多くの方が困難な生活を余儀なくされている福島。もしかしたら岩手はあまり関心が払われていないかもしれせん。あれから六年経過したため、私自身も震災直後に抱いた被災地への思いは薄れていました。

(右下写真・四階まで津波が)

(左下写真・奇跡の一本松と新堤防)

現地を訪れてまず驚いたのは、被災した地域が広大であること。陸前高田は街のすべてが流され、その広さは私の想像をはるかに超えていました。もちろん大船渡でも。テレビで見ただけの衝撃的な被害、それが一つの街ではなく広範囲にわたっているのです。そして、復興がまだまだ進んでいないこと。六年が経ち、原発の問題以外はメディアであまり取り上げられないこともあり、復興はかなり進んでいると思っていました。先日、南三陸町の商店街が復興したニュースが流れましたが、



そこまで復興しているのはまだほんの一部分。陸前高田では、高さ十メートル以上、二キロにわたる堤防は完成、何も無くなった街に十メートル以上の土盛りをしている最中。異様な風景を目の当たりにし、このような街作りが本当に地域住民にとって良いのかとも考えさせられました。

(下写真・土盛り作業)

家ごと波に飲み込まれた方のお話は胸に刺さるものがありました。お会いした現地の方はみな口を揃えて「来てくれて有難うございます」とおっしゃいます。そして胸に刻まなければならぬ言葉、「忘れないください」。あれから六年、現在も被災者にとっては震災後ではなく、震災の真ただ中なのではないでしょうか。また、昨年、女川原発を訪れた方が「原発は安全でクリーンなエネルギーです」と職員から説明されたといいます。同じ原発でも、事故を起こした場所と起こしていない場所でも違うのかと愕然としたそうです。

(下写真・盛り土の上の作業)

現地の僧侶から、お寺ができることについて聞かせていただきました。避難所として、人の話し相手として、その他さまざま役割を担えるということ。誰にも見送られず火葬され、身元が判明してお骨が帰つ



てくるのは本当に悲しい。僧侶が読経し見送ることによって、少しなりとも心が安まる。毎年三月十一日午後二時四十六分に、あの震災を忘れないようお寺の鐘を鳴らすだけでも被災者の力になる、とも教えていただきました。今年初めて一心寺でもその時刻に鐘を鳴らさせていただきました。

東日本大震災以後も熊本地震、鳥取地震など多くの震災が起こっています。香川県もいつ何が起こるか分かりません。被災地支援としてできること、地元での有事の際にできること。小さくても何かできることを、と思いを強くしたことです。

最後に心を打たれたこの文を。

「あの日から六年

七回忌となる「三・一一」が来る。

辛い記憶の中には「忘れたいこと」がある。

「忘れられないこと」がある。

忘れることで日常を取り戻すことができる。

しかし「忘れてはいけないこと」がある。

あの日 揺れる大地の上で

すべてを飲み込む津波を目前に

迫りくる見えない放射能に怯えながら

被災地から遠く離れたテレビの前で

あの日それぞれの場所で

あなたが守ろうとしたものは何だったのか。

抱きしめたいと思ったのは誰だったか。

そのことだけはけっして忘れてはいけない。

それが震災を忘れないということだから。」

(真宗大谷派東北別院。パンフレットより)

南無阿弥陀仏

熊本地震の地を訪れて

三月には熊本を訪れました。熊本城の被害はテレビで見えていた通り。大きな歴史的建造物だけに修復は大変そうで、まだまだ時間がかかりそうです。益城町ではまだ倒壊した建物がいくつも残っていました。木山神社はまさにペしゃんこ(下写真)、手つかずのようです。町内のお寺はほとんど倒壊したそうです。訪れたお寺はすでに撤去され、プレハブの中にご本尊を安置しており、偶然にも法要が勤まっていました。このような状況でも人々が集まり、抛り所になっているということに感銘を受けました。

ただこの地震は、断層上であったか、そうでなかったかで明暗が分かれ、倒壊した家のすぐ近くにほとんど無傷の建物があるという状況(下写真)。同じ地区に住んでいても状況が全く違う、隣近所同士の気持ちのすれ違いが起きないかと心配されます。

被災地の方々が物心ともに復興されますよう念じ、少しなりとも協力していきましょう。

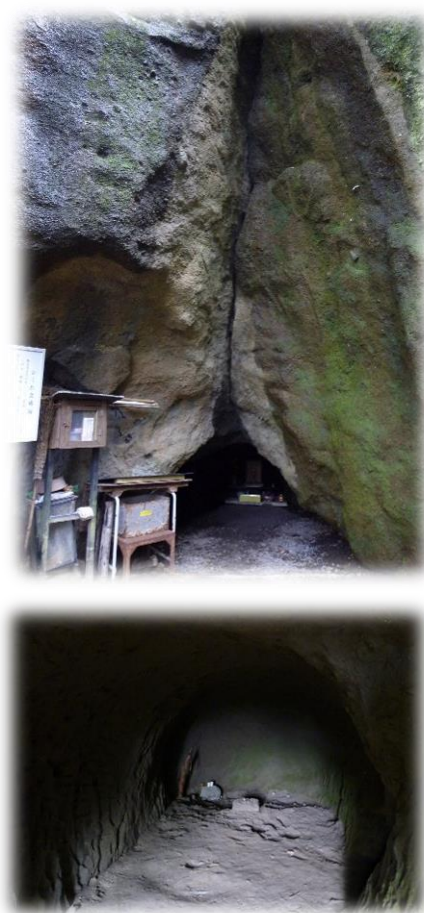
薩摩のかくれ念仏

熊本と合わせて鹿児島へ。薩摩藩は江戸時代、念仏禁制の地でした。キリシタン弾圧は有名ですが、念仏が禁止されていた時代、場所があったことを知っている方は少ないでしょう。当時、真宗門徒は役人の目を逃れて、ガマといわれる山中の洞穴で念仏の集いを



開いていました。今もその跡が残っています。

花尾念仏洞（左写真）、山中にある岩の裂け目の中に十人ほど入れる場所があり、そこにご本尊を安置して念仏したといわれています。近くに水の流れがあり、それが念仏の声をかき消すので都合がよかったです。雀ヶ宮念仏洞（左下写真）。火山灰が堆積した山を掘って造った洞穴のようです。二つの洞穴をつなぐ十六メートルの間道があり、行き来できるようになっていました。



念仏のみ教えは、人はみな平等と説くので為政者には不都合であった。念仏者の力、連帯感への恐れから。お寺への浄財を止めさせ、税として徴収したかった、などの理由があったのではと聞かされました。見つければ処罰されるというのに念仏を称え続けた人々。彼らにとっては、お念仏は無くては生きていけないというほどに大切だったのでしよう。私たちも、何が本当に大切かを問い直してみなければならぬと思います。

熊本では地震によって倒壊した本堂の再建の機運が高まっていると聞きます。鹿児島のかくれ念仏の歴史も合わせて、九州南部における念仏のみ教えの力を感じた次第です。

お坊さんの衣はなぜ黒い？

浄土真宗のお坊さんは普段、黒い衣を着ています。仏教を開かれたお釈迦さまは赤褐色の衣、ポロポロの布をつなぎ合わせた大きな四角の布をぐるぐると体に巻きつけていたそうです。中国では「糞掃衣（ふんぞうえ）」と漢訳されました。インドの仏蹟を訪れた際に見かけた僧侶は、お釈迦さまと変わらない格好でした（下写真）。現在でも、タイやスリランカでは忠実に守っておられます。

では、なぜ日本の僧侶はお釈迦さまと同じ格好をしていないのでしょうか。寒いから、というのが一番の理由でしょう。日本では、

そのような恰好では冬を乗り越えられません。また、仏教が中国・朝鮮半島を経て日本に入ったということも影響しているでしょう。現在の日本仏教の衣の形態も、その雰囲気強く感じられます。



さて、黒い衣というと、喪服のイメージでしょうか。僧侶は葬儀を出すから黒い衣を着ているのでしょうか。

浄土真宗の開祖・親鸞聖人は墨（黒）の衣に墨袈裟というお姿であったと伝えられています。

日本では当初、鎮護国家のために仏教を受け入れました。そのため国が僧侶を管理し、法衣の色によって位を分けたと言われます。親鸞聖人はある時、国家権力によって俗名に改名させられ、流罪にされました。その後、自らを「非僧非俗」とおっしゃられました。非僧、国家のために仕える僧ではない。また煩惱を離れてさとするこ

ともできない。しかし、世俗に染まらない、非俗。「いし、かわら、つぶてのごとくなるわれら」である市井の人々とともに仏法に生きる念仏者である、と。当時、墨色は最も下位の色だったそうです。浄土真宗では、親鸞聖人の姿に倣って墨の衣を着ているのです。

黒(墨) 色が法衣に用いられるようになったのも、中国からのようです。喪服の歴史を調べてみると、その変遷は多岐にわたります。『日本書紀』などの古代文献によると、喪服は白。奈良時代には、喪服は粗末なものをを用いるとして、庶民の衣服材料である麻布や藤布で作られたため「ふじごろも」と呼ばれたそうです。平安時代には鈍色(濃い灰色)、墨染の衣となり、出家の色ともなりました。

江戸時代の武家は、男は麻袴、女は白無垢であったと言われています。一般には、明治末頃までは男性が白の長着に水色の袴など、女性には白羽二重の無垢などだったそうです。北陸地方には、夫が死んだら妻は白無垢を着るとい風習が近代まで伝えられていたそうです。

このように日本では、喪服は黒という期間はけっこう短いのです。現在の喪服が黒という考えは、明治に入って欧米諸国の影響が強まってからです。欧米と同じにしたい、しなければならぬと考えたのでしよう。ちなみに、浄土真宗の僧侶は現在でも葬儀の喪主を務める場合、鈍色(にびいろ) (薄墨) の衣を着ます。

また、浄土真宗の葬儀に参列して、悲しみの場なのに派手な衣だと思ふ方もおられるでしょう。日本では国家が色によって位を分けましたから、その頃から様々な色の衣がありました。先ほど述べたように、親鸞聖人は墨色を着用されました。しかし、浄土真宗でも次第に色衣を着けるようになりました。また、煌びやかな七条袈裟も着用します。葬儀は、故人が浄土に往生したことを表す意味を

持ちます。ですから、浄土の美しさを表す莊嚴の一つとして、様々な色を用いるという考えも成り立ちます。浄土真宗では、色によって位の上下があるというわけではありません。しかし、色で何かしら区別しているという面は否めませんから、あまり良いことではないかもしれません。親鸞聖人に立ち返って、すべて墨(黒)にした方が良いという考えもありますので難しいところです。

報恩講報告



雨模様、肌寒い中の報恩講。例年通り「讃仏偈」と「正信偈」のお勤め。法話は三木秀海師(倉敷市・清楽寺)。

あるおばあちゃんが、正月に帰省した息子に「そろそろ入るとこ探そうか」と言われてショックを受けたという。私の子育ては何だったのだろうか、空しいと。しかし、お寺参りしてよかったという。なぜなら「そのようなご縁が催したらどのような振る舞いでもしてしまおうのが人間である」と聞いていたから。それが真実だと実感した。

普段から「有難う。すみません。お世話になります」と言葉の花を咲かせていたら実がなる。息子にそう言われたとしても周りが放っておかない。南無阿弥陀仏はもっとも大事な言葉の花。必ず実がなる(浄土へ生まれる)。そして種となる(帰って来てのちのものを導く)。

「生き抜いて風にまかせる落葉かな」、葉が散った後には必ず芽が出てくる。あとに続いていくものがある。私たちも素晴らしい言葉の花を咲かせて、あとは風にまかせて、よい人生だったといえるような日々を過ごしましょう。と聞かせていただきました。